

家庭と地域との心の架け橋を目指し、
子どもとの関わり方の一助となれる言葉を発信していきます

6月号

雲の向こうには いつも青い空

梅雨の季節の6月…。月曜日の朝の雨、大人でも足取りは重たいです。まして未熟な子どもたちはどうでしょう。遅刻しないよう朝の準備をしていたら「当たり前でしょ！」でなく、「間に合うようにできて立派ね♪」と優しく送り出してあげてください。

ドキドキの4月、新しい環境や対人関係にも、なじむ5月。そして6月は、いろんなサインが出やすい時期です。駆け抜けたこのふた月、梅雨の雨は、心の小休止です。わたしたち大人の心も、しっとり冷静に受け止める…を。

大人を困らせるようなサインは、「子どもが困っている」サインです。子どもの視点に立ってみると、何かの困りごとを背負っていることが多いです。

「あのね、困っているの…」と言ってくれると「どうしたの？」と声をかけますね。「知らんし!」「フン!構わないでよ」と強い口調だと困っているように映りません。翻訳すると、「困っているけど、上手に助けを呼べないの。本当は、私のこと気にかけてほしいの…」かもしれません。子どもの言葉に、反応するより「何かあったの?」と優しく声をかけると、ポツリポツリと子どもは語り出します。大切なことは、大人が話過ぎず「聴く」ことです。どうしても分かって



ほしいという期待から、ついつい大人は力が入り、時には説得するような展開に…。その時、子どもの表情は曇り空…。子どもは、安心して語る経験が増え、素直に自分の困りを表明してくれます。待つ、受けとめるという「静」の関りは、意外に難しいです。

子どもは、無限の可能性をいっぱい持って生まれますが、何かの不調でその豊かな力が発揮できないようです。SSWは、困りごとを読み解き、その子の本来持っている素晴らしい力が発揮できるように、子どもを取り巻く様々な環境（学校・家庭・地域）を整えます。一方、困りごとを上手に乗り越えた子にも、たくさん出会います。共通して「未来を信じ、自分で切り拓く気持ち」があることでした。

これは、激動する社会に一番必要な力です。大人は、子どもの鏡といわれます。

コロナ禍、ストレスも多く、心が冷え切っています。“冷えた心に灯を…”

まず、身近な大人が子どもの未来を信じていきたいものですね。雲の向こうには、いつも青い空が広がっています。止まない雨は、ありません。その先に、いつも広がっている青空は、希望を抱かせてくれます。子どもの前にいる大人の役割 今 私たちにできること…